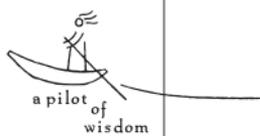


中国人のこころ
「ことば」からみる思考と感覚

小野秀樹 Ono Hideki



序章 「ことば」は人を造り、人を現す

筆者の体験した不思議なデキゴト

2009年の夏、中国人の若い友人に誘われ、その人の帰省に付き合って小さな農村を訪れた。さらに彼の同窓生が暮らしている河北省の都市を4つばかり一緒に巡った。

およそ2週間の旅であったが、途中で私はあることに気がついた。その友人の家族や同窓生たちが一緒にいて、全員が中国語で話している状況だと、彼は決して私に“谢谢 xièxie”（ありがとう）と言わないのである。私が彼に何かしらの行為をして、その反応として“谢谢 xièxie”という台詞せりふが出そうな場面があっても、彼は常に「ハイ」という顔をして何も言わずに澄ましている。ちなみに、普段東京で会って、お互いに日本語で話している時、彼はむしろよくお礼を言う人である。それは日本人同士でいるのとまったく変わらず、「先生、ありがとう」「ありがとうございます」という台詞が日々の付き合いの中でしばしば発せられる。彼は明るい性格で、日本語で話す時も能弁であり、非常に愛想の良い青年である。ところが、中国に行った途端に、彼の口からお礼を表すことばがピタッと出なくなったのである。

たぶん、私はその反応に無意識のうちに興味を覚えたのであろう。旅行が始まって何日か経過した時点でそのことに気付いたので、その後もしばらく様子を見ていたが、事実は依然としてそうであった。数日後、私はホテルの部屋で彼にそのことを告げた。もちろん礼を言わないことを批

難する意味では毛頭なく、「(同じ人物なのに)なぜ、そう変わるのだろうか」という興味本位の疑問を当人にぶつけてみたのである。

彼はしばらく考えたあと、「たしかに先生には“谢谢”って言わないですね」と答え、さらに「中国語で話している時には、先生に“谢谢”とは言いにくいですね」と付け加えた(その理由については第2章で詳しく述べる)。

また、こんな話もある。仕事柄、私には若い中国人の友人知人が何人かいる。上で述べた河北省出身の友人とは別の友人と、ある日浅草に遊びに行った。浅草に着いて地下鉄の改札を出た途端に、その人の携帯が鳴った。その場で電話に出て話し始めたが、通話が始まってすぐに荒々しい口調になった。幸か不幸か中国の出身地の方言で話しているので、私には話の内容がほとんど分からないのだが、どう聞いても友好的な会話には聞こえない。時々大声で叫び、相手を詰問しているか、あるいは叱責しているかのようである。

その友人とも普段は日本語で話しているが、平生は非常に控えめな大人しい性格なので、その時の電話の口調が私にとっては非常に衝撃的であった。内容が聞き取れないとはいえ、些いささか居いた堪たまれないような気持ちになったので、私は少し離れたところで立って待っていた。私のこの感覚が誇張ではない証拠に、通りすがりの何人かの人も、通話をしている友人の側そばを通り過ぎる際に「一体何事か？」という目で見ていることを記憶している。

数分して話が終わり、友人は電話を切って私の方に近づいてきた。「何か揉め事なの？」と尋ねると、「いえいえ、大丈夫です」と笑顔で言う。「でも、なんだかすごく怒っていたみたいだけど……」と続けると、意外そうな顔つきで「えっ、全然怒ってないですよ。今の電話、お父さんからですよ。普通の日常会話です」と言った。それを聞いて私は非常に驚いたのと同時に、あれがごく普通の日常会話ならば、この人の故郷の街には遊びに行かない方がいいかな、というようなことをふと思った。

もうひとつ思い出話を述べる。もう20年近く前のことだが、シンガポールで中国語学の国際学会が開催された。私は恩師に誘われて一緒に参加した。ほかにも日本から数名の研究者が参加していた。その中に日本在住の中国人研究者がいた。その人は私の恩師より少し歳下で、恩師とは長年の付き合いがあり非常に仲が良い。

学会開催中のある日、恩師とその中国人研究者と私の3人で学会会場の外に昼食を食べに行った。下町の風情を感じる区画を歩いて、一軒の瀟洒な中国料理店に入った。薬膳料理も出すお店であった。2階に案内され、テーブルに着いてメニューを開き、さあ注文しようという時にささやかな異変が起こった。その中国人の先生は、恩師と私の目の前で、前菜から始めていくつかの料理、さらに締め主食にいたるまで、注文の一切を自分ひとりでエネルギーに取り仕切ったのである。

これには少々注釈が必要である。ひとつは、その中国人

の先生は、普段は長幼の序を非常に重んじる人で、会食の時も常に同席している先輩を立て、むしろ「あなたは本当に中国人ですか？」と思わせるくらい控えめな態度を貫いている人である。そして二つ目として、私の恩師は食事に対して非常にこだわりのある人で、実際に中国や台湾、香港などで料理を注文した際に、現地レストランの従業員から「あなたは注文の仕方が上手い」と褒められたことも何度かあるような人なのである。そして、そのことは恩師と付き合いのある人であればおよそ誰でも知っていることである。

しかしながら、シンガポールでの昼食の席では、中国人の先生は全てを制御した。注文の途中で、恩師も何品かの料理を提案したが、結果としてそれは却下され、全品中国人の先生が誂^{あつら}えた料理を食べた。もちろんその昼食はとも上手く組み立てられ、非常に美味^{おい}しいものであったが、恩師と私は、その先生の豹^{ひょう}変^{へん}ぶりに瞠^{どうもく}目しながら薬膳料理を堪能^{たんのう}したのであった。爾後、恩師も何かの拍子にその日のことを思い出し「あれには驚いたけれど、同時に面白かった」と懐かしそうに振り返っておられたことがある。

豹変するのは言語のモードが変わった時

以上3つの体験談を述べたが、これらに共通している点は、同一人物が豹変し、人柄まで変わったかのように見えたということである。また、いずれの場合においても、日本語を流暢^{りゅうちやう}に話せる中国人が、中国語を話すモードに入

った時に見せた姿である。言い換えれば、普段日本語を話している時には見ることのできない様相が、中国語を話している時のある刹那に突如として表に現れたということである。日本在住の中国人を友人知人に持つ日本人、あるいは職場などで日頃中国人との付き合いがある日本人は、少なからず上で述べたことと似たような体験をしたことがあるのではないだろうか。また、本書でも追っていくつかなの実例を挙げるが、友人知人の中国人が中国語ではなく、日本語で話している時でさえ、同様または類似の奇妙な事態が起こり、それを目の当たりにして戸惑ったり、驚いたり、疑問に思ったりした経験を持っている日本人も多いのではないだろうか。

筆者は中国語の文法研究と中国語教育を^{なりわい}生業にしているので、中国人の友人知人との日々の交際の中で起こる一見不可思議なデキゴトは、たいてい興味深く面白い現象として映る。しかしながら、多くの一般の日本人からすれば、それらは時には面食らうような事態であり、またストレスを感じることもさへあるかもしれない。さらにそれが^{こう}嵩じてくると、いわゆる異文化摩擦というような事態にも^{つな}繋がりがかねない。

ただ重要なことは、そういった事態が起こったとしても、当の中国人にしてみれば、それは無意識かつ自然な言動にすぎないということである。そこには当然のことながら、何ら悪意や作為は無いのである。

「ことば」は「人を造る」

同一人物であるにもかかわらず、使用する言語が変わると人柄までが変わったように見える現象が起こるということから考えて、言語すなわち「ことば」は「人を造っている」と言えるだろう。中国人が日本語を話している時でさえ、日本人から見て不可解な事態が起こるのは、日本語を話してはいるものの、当人の頭の中では母語である中国語が干渉し、作用しているのである。言い換えれば、中国語の感覚に基づく思考や反応がそのまま日本語になって現れているということである。

言語学のサピア＝ウォーフの仮説（言語相対性仮説）は、一言で言えば「言語の違いは思考や世界の認識に対して影響を及ぼす」というものであり、それをどこまで普遍的に解釈するかは見解の分かれるところもあるが、個別の言語がそれを母語とする人々の思考ないし認知との間に深い関係を有していることは、紛れもない事実であろう。哲学者の森有正氏は、『経験と思想』（岩波書店、1977年）の中で、「『経験』にしても、『思想』にしても、それらは『言葉』とは離すことの出来ない関係に立っている」と述べ、「我々の場合は、『言葉』は日本語である。我々は日本語において『経験』をもち、『思想』を組織する。それ以外にはどうすることも出来ない」と指摘している（pp.42-43、傍点は原文による）。

こういった仮説や指摘を参照し、また冒頭で述べた筆者

のいくつかの体験にも鑑みて、「言語」は少なくともある面において「人」を造っている重要な要素のひとつであり、かつ、表面的には語や文のかたちで現れる種々の様相は、それらを生み出す人々の思惟や感覚、^ひ延いては思想の反映された所産だと言って良いだろう。つまり、ある言語に見られる種々の現象から、その言語を母語とする人々の「集団」としての普遍的な考えや感覚などを読み解くことが可能であり、さらにそれは、人と人とが接触し、コミュニケーションを取り合う場面に見られる、最も基礎的で定型的な言語活動においても顕著に発現していると考えられるのである。

そのような考えに基づき、本書は現代中国語でのコミュニケーションにおける日常ありふれた「ことば」（特定の個人が使う特殊なものではなく、母語話者の最大公約数的な用法としての言語表現や言語的振る舞い）を調査し、分析することによって、その特徴を記述し、それによって中国人の思想や認識、思考や感覚などを考察することを目指すものである。本書では、研究者だけが扱うような高度に専門的な領域に属する言語現象や、複雑な文法事項を取り上げるつもりはない。むしろ、普段の生活において、どの国においても誰もが行なうような言語活動に属する事例を取り上げ、それらについてあらためて考えてみたい。

具体的に言えば、第1章では対話における「あいづち」と「応答表現」を取り上げ、第2章では「挨拶」について考える。第3章では友人知人や周りの人をどう呼ぶかとい

う「呼称」に関する問題から始め、さらに日常よく使う文やフレーズを材に採り、中国語の伝達機能や受信感覚について考える。第4章では、視野を少し広げ、中国人の日常生活によく見られる種々の行動様式から、中国人の価値観や世界認識について、筆者の感じることや思うことを述べる。第5章では、第1章から第4章までの考察から導き出される中国人の思考や感覚が、中国語の文法システムに対しても関与し、影響を及ぼしていると思われる事例を紹介し、言語のメカニズムと思考や感覚が交錯する一面についても考えてみたい。

それぞれの章において、中国語の特徴を考察する基準として、日本語の実態との比較を行なう。本書の目的は、無論中国語の実態と特徴の一端を詳らかにし、そこから中国人の思考や認識を探究することにあるが、比較対象として日本語の現象を取り上げることで、同時に日本語についてもあれこれ考えることができるように思う。

本書で述べる中国人の思考や感覚、認識は、第1章から第5章までのさまざまな考察を通して一貫するものであり、逆に言えば、本書はその思考や認識が、中国人の言語活動におけるさまざまな局面で均しく顕在化していることを指摘するものである。取り上げる現象は、いずれも日常ありふれたものばかりなので、中国語に対する予備知識が無くとも本書の内容は理解できると思われるし、また理解に必要なかつ十分な説明は添えるつもりである。一方、中国語を学習している人や、日常実際に中国との交流がある人が本

書をお読みになり、中国語という言語や中国人の言動について、もし新たな知見を得たと感じていただける部分があれば筆者として幸甚である。

ミニレクチャー「中国語に関する基礎知識」

ここで、普段中国語には馴染^{なじ}みや接点の無い読者に向けて、基本的な事項の説明をいくつかしておきたい。本書では、原則として初出の単語や文には漢字とともに発音記号を付す。既に序章の中でも出てきているが、“谢谢 xièxiè”の“xièxiè”がそれに該当する。中国語の発音表記法は、中国と台湾とでは異なるが、本書では中国で用いられている記号を使用する。それは“拼音字母 pīnyīn zìmǔ”と呼ばれるもので、日本語に訳すと「(中国語) 表音ローマ字綴^{つづ}り」である。日本国内の大学や語学学校など中国語を教える場においては「ピンイン」という通称で呼んでいる。これはアルファベットに中国語の「声調」(音節単位、すなわち漢字一文字ずつの発音に付帯する音の高低変化)を表す符号(“ā·á·ǎ·à”の“a”の上に付いている符号)を組み合わせて表記する。ピンインの読み方はやや特殊であり、中国語学習の経験が無ければ全てを正確に発音することは難しいが、本書の内容は中国語の発音を知らなくとも問題無く理解できるものであり、また発音に関して説明の必要があれば、文章によって音についても説明を加える。世に出ているさまざまな中国語関連の書籍の中には、中国語の発音を全てカタカナで表記しているものもある。それはそれで何らかの必要や考えに基づくものだと思うのだが、本書ではその方法は採らない。

ついでながら、これは余談であるが、“谢谢 xièxiè”の発音をカタカナで「シェイシェイ」と書いている事例が本やインターネットで多く見られる。もしかしたらテレビ番組でもそうやって発音されたことがあるのかもしれない、筆者自身も、ある日、路上で前を歩く女子高校生たちが「中国語でありがとうって、シェイシェイって言うんだよ～」と話しているのを聞いたことがある。しかも彼女たちはそれを上昇調（「シェイ↑シェイ↑」と下から上に持ち上げる調子）で言っていた。さすがに後ろから「それは全然違います！」とも言えず、ちょっと齒痒い思いをした（だから、以下に説明をする）。

“xièxiè”の“x”は「シ」の子音部分を表すのだが、綴りを見て分かるように、それに続く母音の部分は“ie”である。この場合は“i”と“e”をローマ字読みして良いので、敢えてここだけカタカナで書けば「イエ」である。よって“谢谢”は「シエシエ」となる。さらに一文字目の“谢 xiè”をストンと急降下する下降調（中高年の日本人女性が軽い驚きを表して「まあ、！」とか「あら、！」と言う場合の上から下へ落とす調子）で発音し、二文字目の“谢 xie”は声調符号が付いていないので、軽く添えるように発音する（これを「軽声」と言う）。もし読者諸賢が中国語でお礼を言う機会があれば、参考にさせていただきたい。

中国語には日本語と同様に、各地域の方言が存在する。中国は国土が広く、方言の数も多いので、それぞれの方言間には大きな差があり、甚だしいものは外国語ではないか

と思わせるような違いさえある……という説明が中国語のテキストや参考書でされている。それはまさしく事実であり、たとえば四川省の人と福建省の人が互いに地元の方言で会話をしても、ほとんど分かり合えることはないだろう。ただ、日本でも同様のことはあり得るのであって、筆者は関西の出身であるが、山形県で公衆浴場に行った折、湯船に浸かっている周りの老人の会話が一言も聞き取れなかったことがある。それではコミュニケーションが成立しないので、中国にも日本語と同様に共通語が存在する。それを中国語では“普通话 pǔtōnghuà”と呼んでいる。「^{あまね}普く通じることば」という意味である。本書で「中国語」と言う場合、断りが無ければ全てこの“普通话”を指し、時にはこれを「共通語」と呼ぶ。

また、中国語が漢字を使って表記する言語であることは、誰でもご存知のことだと思うが、中国語圏で使用されている漢字には二つの書体があり、いずれも日本語で使用している漢字と全てが同じわけではない（同じ漢字もある）。本書では原則として中国とシンガポールで正式の書体として用いられている“簡体字 jiǎntǐzì”を使用する。これは文字通り簡略化された漢字の字体であり、最も違いのある例を少し挙げると、日本語の「義」は中国では“义”と書き、「塵」は“尘”と書く。文字についても、本文の理解に必要な場合は、その都度個別に説明を加える。

なお、本書で挙げる中国語の例および例文には日本語訳をつけるが、それは全て筆者の翻訳によるものである。

補注——本書で扱う資料について

本書を執筆するにあたり、あらためて中国人の会話や対談、言語感覚などについて、さまざまな面から調査を行なった。調査資料としては、主に以下のものが挙げられる：

- ①中国のインタビューおよび対談番組
- ②中国で過去15年以内に放映されたドラマ
- ③中国映画
- ④中国語のコーパス資料
- ⑤中国で近年発表された小説
- ⑥中国人へのアンケートと聞き取り調査

まず、全体を通して気を配ったことは、調査資料はできるだけ新しいものを選んだということである。筆者は学生時代に恩師から「言語はファッションである。流行り廃りがある」という比喩を聞いた覚えがあるが、最近それを実感することが多い。20年とか30年とかいった時間を隔てると、母語話者の中でも言語に対する感覚が違うのだなと感じる場面にたびたび遭遇する。たとえば現在60歳の中国人と30歳の中国人とでは、ことばの使い方や文の許容度などで判断が分かれるケースが時折出現するのである。中国語に関する解説書や、いわゆる異文化理解について書かれたような書物は、我が国においても今日まで既に龐大な数のものが上梓されているが、それらの中には今から15年以上前に書かれたものも少なくない。そういった書物に書かれている内容には、現在の若い中国人と話している時に些か齟齬を感じるものも含まれている。よって本書では、主として筆者よりも若い人たちの言語感覚を積極的に採り入れて調査することを試みた。つまり、より現

代的で直近の感覚を取り込みたいという意図である。

以下、調査資料のそれぞれの項目について補足する。

①のインタビューは、できるだけ対話者が二人きりで自然に話しているものを選び、スタジオで観客のいる番組や、バラエティ番組は避けた。主な番組として、《十三邀》《杨澜访谈录》《鲁豫有约》《锵锵三人行》《可凡倾听》などが挙げられる。これらはいずれも中国のテレビにおける長寿番組で、ホストが毎回異なるゲストと1時間程度対談する形式のものである。

②は、筆者は普段は一切ドラマを見ないので、最も不得手な分野であるが、中国人留学生に教を請いつつ、合計十数作のドラマを見た。一部の題名を挙げると《手机》《黑洞》《王海涛今年四十一》《贫民张大民的幸福生活》《小别离》などである。都会や農村を舞台としたもの、家族の話、刑事物など、できるだけジャンルを広げて調査した。

③の映画は個々の作品名を挙げないが、本書の調査という目的で、ジャンルの異なる作品を計20本ほど見た。なお、①②③の映像系の資料については、筆者の聞き間違いによる誤解を防ぐ意味で、原則として中国語の字幕がついているものを選んだ。

④のコーパス (corpus) というのは「集成資料」のことだが、具体的に言うと、中国語の実例を小説などの文学作品や新聞記事といった、さまざまな分野の文字資料から集め、データベース化したものである。中国で公開されている代表的なものとしては、以下の二つが挙げられる。

- (1) CCL語料庫 (北京大学中国語学研究中心)

http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/

- (2) BCC語料庫 (北京語言大学大数据与語言教育研究所)

<http://bcc.blcu.edu.cn/index.php>

(1)には計7億字のデータが収録されている。(2)は新聞記事や文学作品以外にも、個人の“微博 wēibó”(ミニブログ)や科学技術関係の資料など、より幅広いデータ源を有し、総計150億字を収録している。

⑤の小説は、上記④のコーパスにも大量に収められてはいるが、筆者が補助的に個別に作品を調査したものがここに含まれる。できるだけ最近の中国語の実態を反映させたいという目的から、たとえば路内 Lù Nèi (1973年生まれ)や、郭敬明 Guō Jìngmíng (1983年生まれ)など、若い世代に属する作家の作品を数篇選んで参照資料とした。また、現在中国で最も人気のあるSF小説である《三体》(2007年～2010年)なども参照した。それらに加え、中国語と日本語の用例を比較対照するために、日本人作家の小説とその中国語訳版も参照した。

以上の資料のうち、①から③の映像資料ならびに⑤の小説は、言うまでもないことだがいずれも人が創作したものである。①のインタビューは「ぶっつけ本番」であれば自然な対話にかなり近いかもしれないが、カメラが回っているという時点で、日常の友人同士の会話などと同じものではない。ドラマや映画には無論脚本がある。小説の会話も作者が作り出したものである。しかし、本書がこれらの調査資料で調べた事項は、第1章から第3章において取り上げる「あいづち」「応答」「挨拶」「友人知人の呼び方」の4項目に属するものだけである(ただし、用例としては第5章でも資料から採取した例文を一部使っている)。これら4つの事項はある命題を述べたり、現状を詳細に描写したり、人の考えたことや感じたことの内容を表したりするような複雑多様な文ではない。いずれも短く単純で、パターンのなものであり、その中の一部は、半ば反射神経の作用に基づいて発せられ、受け止められ

るレベルの言語活動で用いられるものである。それゆえに、ドラマや映画、小説などにおいても、これら4つの事項はリアルな日常生活における実態から乖離した部分が極めて少ないと考えられる。資料に関する細かい注釈は第1章以降の本文でも述べることもあるが、以上の理由により、これらの資料から得られた情報には、十分に依拠する価値があると本書では考える。

ただ、歴大な資料を調べているうちに、さまざまな疑問点や確認したい事柄が出てくるのも事実である。さらに、調査結果から導き出される実態が、どれくらい一般性や普遍性を備えているのか、あるいは逆にどの程度可変性が認められるのかも重要なポイントになるが、そういった疑問に対して資料自体は何も答えてはくれない。そこで、それらを補う意味もあり、⑥の中国人に対するアンケートと聞き取り調査を実施した。調査に協力していただいたのは、筆者の友人知人や学生の方々である。アンケートは質問事項を書いた調査書を作成し、それに記述してもらう形式で進め、回答を得たあとでさらに疑問点がある場合には、個人または数名に対して追加の質問をし、説明や意見を求めた。中国人は親切なもので、アンケートをさらに自分の友人に回して回答を集めてくれた人もあり、また、自身のブログに質問をアップして回答を募り、ご丁寧に集計までして筆者に報告してくれた人もあった。そういったご厚意にも助けられ、20代から40代の中国人、合計約70名から回答とご教示を得ることができた。アンケートの回答からは、筆者自身がこれまで知らなかった事実や、さまざまな興味深い情報を得ることができた。このことは筆者自身にとっても予想以上の収穫であった。ご協力いただいた皆さんに、厚くお礼を申し上げたい。また、筆者からの質問に毎回丁寧に回答してくださり、時には補足的な資料の提供などもしてくださった方々に、この場を借りて心から感謝の意を表したい。

目 次

序 章 「ことば」は人を造り、人を現す ————— 3

筆者の体験した不思議なデキゴト

豹変するのは言語のモードが変わった時

「ことば」は「人を造る」

ミニレクチャー「中国語に関する基礎知識」 ————— 13

補注——本書で扱う資料について ————— 16

第1章 対話における反応 ————— 25

——聞き手はどう対応しているか？

1. 「反応」と「応答」の表現に関する問題

日本人店長と中国人アルバイトの会話

中国語による干渉

意味は同じ、されど違う

反応や応答を表す表現には機能的な説明が必要

2. 「あいづち」について考える

「あいづち」とは何か？

「あいづち」と「応答判断語」を区分する

「あいづち」の定義

日本語の「あいづち」

中国語の「あいづち」

日本語と中国語の「あいづち」の使用状況

「あいづち」の多用を生み出す要因

二人きりで落ち着いて真面目に話す時
中国語はシンプルに受け止める

3. 「応答判断語」について考える

「はい」や“yes”に該当する中国語の語彙
“对 duì”と“是 shì”

“对”“是”と「そうです」の違い

“对不对？ duìbùduì?”と“是不是？ shìbùshì?”

「なるほど」による受け止め

中国語における受け止め方

“可不是嘛！”について

中国語における応答——機能的かつ実義的

第2章 人間関係とコミュニケーション ————— 73

——「挨拶」について考える

1. 「公」の挨拶

“你好！”と「こんにちは」

「こんにちは」は、いつ誰に使う？

2. 人間関係の認識

「身内」と「他人」

“自己人”に対する意識とその変化

3. 「私」の挨拶（1）——相手と呼ぶ

相手の名前を呼ぶという挨拶

対話中にも相手の名前を何度も呼ぶ中国人

名前を呼べば親しみと連帯感が生じる言語

相手への呼びかけは発話の予告ではない

相手の名を呼びかけることの機能

「ことば」の行き先を明示することの意味

4. 「私」の挨拶（2）——行動への言及

「食事は済みましたか？」

日本人も日常よくしていた挨拶

相手や自分の行為について言及する意識の変遷

5. 教育によって習得する挨拶語

日本人の挨拶教育

“叫叔叔！”（叔父さんと呼びなさい！）

「オバサン」と呼ばないで！

「お姉ちゃん」と呼ぶな！

6. 挨拶語の意味とその起源

第3章 中国語の伝達機能と受信感覚 ————— 123

——「意味」による呪縛

1. 人の呼び方（呼称）について

若い李さんを“小李 Xiǎo-Lǐ”と呼べるか？

壮年の社会人同士はどう呼び合っているか

個性と音のコラボレーション

持ち上げて呼んでおけば無難という思考

社会体制の複雑化と中国語の個別の実義性の葛藤

「李さん」と呼ばないでください

2. 「意味（論）」に惹き寄せられる中国人

「お疲れ様でした」と言われて

現実世界のデキゴトに密着した意味解釈

「いつもお世話になっております」

抽象性と依存性（甘え）には縁遠い中国語
断ったつもりが大いに励まされ
注意事項の書き方

3. 「語用論」の領域に属する意味の食い違い
寒くないですか？
日本人の対話の相手は心情的共鳴者
「ウナギ文」について
中国語の「ウナギ文」
中国語は語義に執着する
「場」を察する日本語、「かたち」を追う中国語

第4章 中国人の価値観 173

——現実世界の認識と行動の規範

1. 中国人の趣味趣向と判断基準
数字に関する験担ぎ
台湾における数字の語呂合わせ
大きいことはいいことだ
客観的基準となる量化と数値化の重視
なぜ初対面の相手に給与の額を尋ねるのか？
重要なのは金額という「数値」
中国人は中身より「かたち」を重く見る
2. 中国人に見る「現実主義」
既定路線よりも臨機応変を優先
機転を利かせることに公私の区別は無い
オンライン百科事典における記述内容の差異
スポーツの実況中継

語学教育の方法における違い
現実主義は儒教から伝承されている思想なのか
儒教に対する現代中国人の意識
中国人の現実主義の礎をなす思考と感覚
言語は変化するが、思想と感性は受け継がれる

第5章 言語システムに侵食する思考と感覚 —— 221 ——法則の背景に存在するもの

1. 「五感で捉える」属性を表すことに偏る文法形式
重ね型は話者が知覚した属性を報告する形式
2. 自分の実体験に基づく評価を述べる語彙
3. 会話や段落における「かたち」の影響
4. 存在表現の拡張と評価の関係
人は「プラスであること」が常態だと思っている
主観的な言語表現に見られる有標性

あとがき _____ 253
——「ことば」は「思惟・感覚」を支配する